

## 第2学年1組 算数科学習指導案

日 時 平成30年4月24日(火) 10:50~11:35

場 所 1年1組教室 指導者 浦 郷 淳

### 本授業のキーワード

問いの更新 知識の選択 理由づけ 10の合成

#### 1 単元名 たし算のしかたをくふうしよう～たし算～

#### 2 単元について

##### (1) 単元について

本単元は、加法の筆算と初めて出合う場面である。今後の加法・減法の筆算形式の基礎となるもので、位をそろえて書くなどの基本的な事柄をきちんと理解する必要がある。本単元では、1年での加法をふまえて、加法の関係を式に表すことを理解し、さらに、十進位取り記数法と関連付けて、筆算の仕方を理解することが主なねらいとなる。どの位でも10をこえると上の位へ1繰り上がるという筆算の仕組みを理解させることを大切にしつつ、加法に関して成り立つ性質として、加法の交換法則にも触れる。一般的生活場面との接続を図りつつ、計算技能の習得を図っていく必要がある。

##### (2) 児童について

本学級の児童の算数に関する結果は、以下の通りである。1年生の加法に関する調査では、多くの児童が満点に近い結果であった。

算数についてのアンケート(4月実施:35人)

しかし、この結果を見ると、算数に対する好意度に対して、自分の考えを書いたり発表したりすることについては、それほど好意的ではないことが

| 項目                    | 回答(人) | 好き | まあまあ | 嫌い |
|-----------------------|-------|----|------|----|
| 算数は好きですか。             |       | 19 | 15   | 1  |
| 算数で自分の考えを書くのは好きですか?   |       | 14 | 20   | 1  |
| 算数で自分の考えを発表するのは好きですか? |       | 13 | 16   | 6  |

わかる。つまりは、算数的に書くことの面白さ、発表することの楽しさに触れるような授業を組み立てて行う必要がある。計算の基礎的な技能を高めつつ、その計算方法を表現する活動にも取り組みたい。

##### (3) 指導について

本単元の指導にあたっては、児童自らがもつ加法の知識をつないで、計算の方法を説明する活動を大切にしていける。単純な計算技能の習得に留まることなく、問題状況の提示から問いをもつ場面、問題解決する場面での様々な方法の交流場面、そして問いの更新場面を大事にした授業を行っていく。

問題状況の提示においては、日常生活とつながるような提示を行うことで、必要な知識をつないだ問いの設定を行う場を設ける。「これだったらできる」という意識と「こう変えたらできるのではないか」という意識とをつなぐような問いかけを行い、計算の説明ができるような場へとしていける。説明の場面では、児童の発言を教師が整理し、必要な算数用語に置きかえながら、加法計算に必要な知識の獲得へと迫っていく。さらには、問題の条件を拡張したり、部分的に変更したりすることで、問いの更新を生み、授業の中で獲得した知識が活用できるような場面を設けていくこととする。

#### 3 単元の目標

2位数の加法の計算、筆算の仕方や加法の交換性について、具体物や図、数、式、ことばなどで考え説明するような活動を通して学び、生活や学習に活用しようとする態度や2位数の加法の計算の仕方を考え、解決する技能を身に付けることができるようにする。

#### 4 単元の評価規準

ア 2位数の加法の計算が1位数などについての基本的な計算を基にしてできていることや、筆算の仕方について理解し、それらの計算ができる。 【知識・技能】

イ 数量の関係に着目し、計算の仕方を考えたり計算に関して成り立つ性質を見いだしたりする。

【思考・判断・表現】

ウ 加法について、数学的に表現・処理したことを振り返り、数学的な処理のよさに気付き、生活や学習に活用しようとしている。 【学びに向かう人間性】

## 5 本時の指導（7／10）

### (1) 本時の指導目標

1位数や2位数の計算の仕方について、その規則性を図や式、筆算などを用いて考える活動を通して学び、計算が簡便にできる場合を考えることができるようにする。 【思考・判断・表現】

### (2) 本時の評価規準

イ 数量の関係に着目し、計算に関して用いる性質を選択し活用しようとしている。 【思・判・表】

### (3) 本時の展開

| 学習活動と児童の反応（□□□□）   | 教師の働きかけ（○）と形成的評価（◆）   |
|--|---|
| <p>1 状況を知り、問いをもつ。 (10分)</p> <p>(1) 状況を知る。</p> <p>あつしくんは、おかねをいくらかもって、おかしを2つかいいきました。<br/>1つは、37円のおかしをえらびました。</p> <p>(2) 問いをもつ。</p> <p>もう1つは、いくらかな？</p> <p>12円・23円・37円・40円・58円<br/>今日の□円はいくらだろうね。</p> <p>2 困らない数字の理由を考える。 (20分)</p> <p>(1) 困らない数字を考えて、その理由をノートに書く。</p> <p>12円…繰り上がりの計算がないから<br/>23円…7と3をたすと10になるから<br/>37円…筆算を習っているから<br/>40円…一の位の計算が簡単だから<br/>58円…筆算を習っているから</p> <p>(2) 理由を共有する。</p> <p>3 数を拡張して考える。 (10分)</p> <p>(1) わかっていないお菓子の代金で考える。</p> <p>53なら、1の位の計算の答えが10になるからから簡単だよ。<br/>もし、…だったら…。</p> <p>(2) あつしくんがもつ、お金の金額から考える。</p> <p>4 ふりかえりを行う。 (5分)</p> <p>筆算でなくても、簡単にたし算の計算ができる時がある。</p> | <p>教師の働きかけ（○）と形成的評価（◆）</p> <p>1-(1) 児童が単元を通して「どのようなたし算の方法になるのか」を考えられるようにするために、提示する状況は変えずに毎時間提示する。</p> <p>1-(2) 新しい数が入られるように、状況の中の1つのお菓子の代金を□円に常にしておく。</p> <p>1-(3) 児童が自らもつ知識を選択して活用できるようにするために、もう一方の値段がいくらであれば困らないのかを問いかける。</p> <p>1-(4) 児童自身が自分の意見をしっかりとめるように、答えを選択する場を設け、立場をはっきりとさせた上で、学習に取り組みさせる。</p> <p>2-(1) 様々な方法で考えられるように、図や式、言葉だけでなく、筆算等も方法として認める。</p> <p>◆ 自分が選択した困らない数字について、理由を考えているか。（ノート）【思・判・表】</p> <p>A—図や式、言葉等を使って、説明している。</p> <p>B—筆算を用いて答えを確かめている。<br/>→筆算の説明を言葉で書くように促す。</p> <p>C—理由を記述できていない。<br/>→同じ考えの友だちと交流する場を設ける。</p> <p>2-(2) 児童が、自分の考えの理由づけをしっかりとできるようにするために、同じ考えの児童同士での交流する場を設ける。</p> <p>3-(1) 児童が本時の学びを活かせるかをみるために、わかっていないお菓子の代金を予想させる。</p> <p>3-(2) 児童に、10の合成に着目させるために、53を提示し、計算が簡単かどうかを問いかける。</p> <p>3-(3) 逆算的に考えられる場を設けるために、金額を提示し、最初に示した数の中でどれだったら購入できるのかを問いかける。</p> <p>4 学びの接続を図るために、気付きや本時で得た新しい知識を記録する場を設ける。</p> |

